

羊水中グルコース濃度, 細胞数, 白血球エステラーゼの所見は CAM, 胎児感染の診断に有用と考えられ, グルコース濃度は敏感度, 特異度とも90%以上だった。

9) 出生前診断で嚢胞を指摘された胆道閉鎖症の1例

飯沼 泰史・岩淵 眞
内山 昌則・内藤万砂文 (新潟大学)
八木 実 (小児外科)
本多 晃・関塚 直人
高桑 好一・田中 憲一 (同 産婦人科)
松永 雅道・許 重治
内山 聖 (同 小児科)

症例は46生日の男児。胎生24週より肝下面に直径2cmの嚢胞を指摘され, 37週2812gで出生した。総胆管の拡張を認め, 生後2週間は黄色便であったことから, 先天性胆道拡張症として経過観察された。しかし37生日より灰白色便が出現し, 胆道閉鎖症の疑いで, 58生日に開腹手術を施行された。手術所見では総胆管の嚢腫状拡張と肝門部微小肝管開存, 肝内胆管の雲母状変化を伴うI型胆道閉鎖症であった。肝門部空腸吻合部再狭窄のため, 再手術を140病日に再手術を施行したが, 以後順調に経過し黄疸は消失した。

10) 出生前診断された泌尿器疾患の治療方針

山際 岩雄・小幡 和也
斎藤 浩幸・大内 孝幸 (山形大学)
島崎 靖久 (第二外科)

1987年から1997年までの11年間に当科で扱った出生前診断症例は64例で, 腎尿路疾患は29例45%を占めた。腎盂尿管移行部閉塞による水腎症16例, 多嚢性異形成腎7例, 原発性閉塞性巨大尿管2例, 両側膀胱憩室1例, 膀胱尿管逆流2例であった。腎盂尿管移行部閉塞による水腎症は4度以上の水腎で利尿レノグラムでラシックスに反応のない12例を手術適応とし, いずれも腎囊をおかず一期的に Anderson-Hynes 腎盂形成を行った。手術日令は5から232日(中央値58日)だった。多嚢性異形成腎はいずれも経過観察したが, 2才過ぎても縮小しない3例で切除した。原発性閉塞性巨大尿管は1例は生後26日に一期的に, 1例は腎囊造設後, 生後45日に, 尿管膀胱吻合を行った。VURの1例は生後3か月で逆流防止術を行い, 1例は経過観察した。両側膀胱憩室は生後10か月で, 憩室切除, 尿管膀胱吻合術を行った。全

例腎機能は保たれ良好に経過している。

11) 右横隔膜ヘルニアの1例 (出生前診断例)

大沢 義弘・近藤 公男 (太田西ノ内病院)
鈴木 律子 (小児外科)
増谷 聡・池上 博彦 (同 小児科)

'95年以降当科で経験した先天性横隔ヘルニア症例は8例で, いずれも生直後発症例であり, 待機手術にて対応してきた(内死亡2例)。

このうち最近経験した症例は, 出生前診断された右横隔膜発症例で, 肝右葉も横隔内(左側にまで及ぶ)に陥入した横隔膜全欠損の重症型であった。これに対し, 生後4日目に開胸腹手術にてパッチ(ゴアテックス)を用いて閉鎖した。

術後8病日頃までは比較的順調に経過したが, 同10病日肺高血圧(PPHN)の再増悪をきたし呼吸循環不全にて死亡した。

II. 特別講演

「胎児医療の最近の進歩」

名古屋市立大学産科婦人科学教室教授

鈴 森 薫 先生

第40回新潟造血器腫瘍研究会

日 時 平成11年3月26日(金)
会 場 有任記念館

一 般 演 題

1) EPOCH 療法が奏功した高悪性度悪性リンパ腫の一例

今井 洋介・張 高明 (県立がんセンター)
新潟病院内科
有本 直樹・小松原秀一 (同 泌尿器科)
本間 慶一・根本 啓一 (同 病理科)

症例は84歳, 女性。膀胱内腫瘍にて尿閉状態となり, 当院泌尿器科へ紹介入院。末梢血中に異型リンパ細胞を